

3 国語学史の観点から見た金壽卿

チェギヨン ボン
崔 旻 鳳

1. 序論

この論文は金壽卿の言語学関連の翻訳物、文法論および文体論に関連した論文などを分析し、その研究が持った国語学史的な意義を明らかにすることを目的としている¹。

金壽卿は1940年代後半から60年代末までに文法論、言語政策論、文体論などを主題としたさまざまな論文や単行本を發表したが、それらは当時、主要な論争の中心となったり、新たな領域を切り開いたりするような研究であった。ここで注目すべき点は、彼の研究が構造主義的な分析の方法論に依拠していただけでなく、当時のソ連言語学の研究動向に敏感に反応していたという事実である。このような研究履歴からすれば、彼は伝統的な国語学の議論を深化し多角化するのに極めて大きな役割を果たしたといえる。だとすれば、金壽卿に関する研究は、北朝鮮の国語学の研究傾向を把握するという次元から抜け出す必要がある。特にソ連言語学界の研究成果を翻訳紹介し、これを国語研究に適用したことを理念的な側面のみから評価し²、その結果、彼の研究に対する国語学史的な評価を疎か

¹ 筆者は、窮極的には南北朝鮮の研究を包括した国語学史が記述されるべきだと考えており、このような観点から「国語学」と「国語学史」という用語を使っていることをことわっておく。

² 金壽卿を、唯物論的言語学に象徴されるソ連言語学を導入して北朝鮮の国語学を確立した人物としてだけ見ることがその一例である。

にしてきたことは反省を要する部分である。

このような問題意識にもとづき、先に発表した論文〔崔炅鳳 2009〕では金壽卿の研究を翻訳、文法論、国語政策論、辞典学、文体論、国語学史などに分けて整理しながら、彼の研究が持っている国語学史的な意義を概括的に評価した。しかし概括的な研究であるがゆえの限界があり、崔炅鳳〔2009〕においても金壽卿の研究を深く分析し、研究史的な位相を明瞭に示すことはできなかった。したがって本稿では、崔炅鳳〔2009〕の議論を深化することを第一の目標として設定し、金壽卿の研究のなかでも、国語学史的に意味があると判断される論文を集中的に分析し、それらの国語学史的位相を明らかにしようと思う。

本稿は、次のような順で議論を進める。2では、金壽卿の研究履歴と彼の研究から把握し得る言語学的な問題意識を連結させながら、金壽卿に対する国語学史的な評価の方向と枠組みを定める。3では、彼の国語学論文のうち代表的な4本の論文³を分析・評価する。

2. 言語学的な問題意識の国語学史的意義

金壽卿が活動していた頃、社会主義圏の国の言語学者たちは、構造主義的な分析の方法論とマルクス主義の世界観を調和させるという問題に苦心しなければならなかった。当時の状況において、言語分析の方法論は基本的に構造主義の方法論を受け容れるほかなかったが、その一方で、言語の歴史性と社会性を排除しながら言語体系を構築することに関心を傾けた構

³ [金壽卿 1947] 1947.05.「龍飛御天歌挿入子音考」『震檀学報』15.

[金壽卿 1956a] 1956.02.「朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題について（上）」『朝鮮語文』1号.

[金壽卿 1956b] 1956.04.「朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題について（下）」『朝鮮語文』2号.

[金壽卿 1963] 1963.08.「文風についての理解をさらに深化するために」『朝鮮語文』3号.

造主義は、理念のうえで歴史性と社会性を根幹に据えるマルクス主義と背馳していたためである。しかしこのような時代の要請は、言語学の方向について新たな探索をする契機にもなった。金壽卿の研究は、理念の時代を生きなければならなかった構造主義者が、理念を意識して模索した研究の様相をよく示している。この章では、金壽卿の問題意識を、構造主義的な研究方法論と唯物論的言語観の調和、理論的国語学と実践的国語学の調和に分けて検討する。

2-1. 構造主義研究の方法論と唯物論的言語観の調和

崔炅鳳 [2009] では、金壽卿が1947年に発表した論文「龍飛御天歌挿入子音考」に注目しながら、この論文について、構造主義の方法論を国語文法研究に適用させた最初の業績として評価した。崔炅鳳 [2009] で特に注目した点は、「サイシオツ (사이시옷)」*¹の分布の様相を把握し、その特性を明らかにする手続きだったが、このような手続きにおける厳密性は、同時代の研究水準を考慮したとき、科学的言語研究の模範事例だと評価し得るものである。

このように金壽卿は科学的言語理論を受容し、これを国語の現状分析に適用することによって国語研究の水準を高めるのに寄与した。卓越した外国語の実力と東京帝大言語学科大学院で修学した経歴などを考慮すれば、彼は当時の国語研究の科学化という時代的要求に応えることができる数少ない研究者だったのがある。だが、金壽卿の学問的経歴を見ると、彼を構造主義理論に精通した研究者であるということだけでは評価できないことがわかる。

金壽卿は、ソ連の言語学書籍と論文を翻訳しながら、これを自らの議論

*¹ サイシオツ：2つの語を合成する際にその間 (サイ) に挿入する 'ㅅ' (シオツ) のこと。
(例) 바다 (海) + 가 (へり、際、端) = 바닷가 (海辺)。

に適用したが、そうした研究は、唯物論的言語学を志向した北朝鮮の国語学界が理論的土台を構築するのに寄与した。ここで、彼の研究傾向に関連して特に注目しなければならないのは、彼が1949年に翻訳した『言語学』（A. A. レフォルマツキー著）である⁴。南北朝鮮の国語学界に、言語学の概論書が翻訳されていなかったという現実と、当時のソ連言語学の高い水準⁵などを考慮すれば、この本の翻訳は科学的な言語研究の方法論の受容と普及という側面から新たに評価する必要がある⁶。

『言語学』の構成および内容上の特徴は、2つの側面から整理することができる。まず、この本は言語の構成単位と分析方法に対する説明を基本に据えてはいるが、それぞれの説明に歴史主義的な観点を付け加えている⁷。こうした点から、言語の本質を歴史性と力動性に求めながらも、文章および単語の構造分析と言語単位についての概念を確立する過程においては構造主義の成果を忠実に反映しているということを確認することができる。

（金壽卿が翻訳した『言語学』における概念設定の事例）

音韻：「音韻とは、形態部〔形態素の北朝鮮での訳語〕および語の区別に

⁴ 原著は1947年に発行されたレフォルマツキー（A. A. Реформатский）の《Введение в языковедение》（言語学概論）である。この本は1967年まで持続的に改訂版が出るほど、ソ連の言語学界に多大な影響を及ぼした。1955年に出た最初の改訂版で大幅に直された部分はマル理論を紹介した第6章（世界の言語とその分類）であった。

⁵ プラハ学派から構造主義が本格的に発展し始めたが、プラハ学派の主軸はロシア・フォルマリスト（形式主義者）たちだった。かれらは1920年代後半にマルクス主義者たちから批判を受けてソ連の学界を去ることになったが、かれらによって発展した構造分析の方法論までが否定されたわけではなかった。

⁶ この本は大学の教材用として翻訳された本だが、その点において、この本の記述内容と翻訳された文法用語は北朝鮮の国語学が体系化される過程で主に参照されることになった。

⁷ 一例として、品詞について説明した後、次のような追加説明を付け加えている場合を挙げることができる。「注意すべきは、品詞が決して時間と空間を超越した永久的な範疇ではなく、その逆に、言語と時代によって制約される歴史的現象であるという事実である。」（172ページ）

用いられる、言語の声音構造の単位であり、それによって言語の意味的な単位（形態部、語、文章）が構成される最小の要素である。」（124頁）

音韻体系：「音韻が意味的な役割を担うことになるのは対立のおかげである。ただ1個の標識によって区別される対立を相関対立または相関とよぶ。」（126頁）

変移音：「変移は常に1個の音韻に属してそのニュアンスとして現れる。」（128頁）

形態素：「形態部は語詞において意味を有する最小の単位である。」（141頁）

次に、この本の構成を見れば、音韻論と文法論に先立って語彙論の領域を最初に提示している。特にこの本での語彙論が構造主義的な意味関係だけでなく、「多義性、隠喩、換喩、文脈（脈絡）」等を重要なものとして扱っている点は注目する必要がある。語彙論を強調したのは「単語、語音、文法的範疇」等を分析するとき、その文体論的な意義をあわせて考慮しなければならないという観点を反映したものである。このように、言語の歴史性と言語使用の具体的な脈絡を重視したのは、歴史主義と文脈主義にもとづいた唯物論的な言語観によるものだと言える。

以上、『言語学』の構成と内容から見たソ連言語学の傾向は、北朝鮮の国語学界における研究傾向、特に金壽卿の研究傾向を理解するうえで示唆するところが大きい。これは2つに整理することができる。まず、北朝鮮の国語学で確立しようとした唯物論的観点は、いわば歴史的でダイナミックな観点からの言語研究だったが、それが構造主義の研究方法論との断絶を意味するわけではなかったという事実である⁸。歴史主義的な言語学と構造

⁸ 金壽卿が翻訳した『言語学』は、1953年にマル理論に対する批判が本格化するなかで出版が中断していたが、1955年に柳應浩によって新しい言語学概論書である『言語学概要』が

主義的な言語学のあいだが断絶しているというよりは、ある面においては相互補完的な特性を持っていたという点⁹を考慮するならば、このような見方は容易に首肯されよう。もう1つは、金壽卿の研究が文法論研究から文体論研究へと拡張していき、北朝鮮の国語学界が文体論研究を重視する傾向を帯びることが、ソ連言語学界の流れと連関しているということである。

では、これまで初期の北朝鮮国語学の展開過程について、「ソ連言語学理論の導入と構造主義文法との断絶」として単純化する態度が一般化されてきたのはなぜだろうか。これを知るためには、まず1950年代前後の唯物論的言語学に対する北朝鮮の国語学者の認識態度を点検する必要があり、その次に唯物論的言語学に対する現在の韓国の国語学者の認識態度を点検する必要がある。

北朝鮮の政府樹立以後、北朝鮮の国語学者たちはマルクス主義を国語学研究に適用しようとした。北朝鮮の国語学者たちがソ連言語学に注目したのはそのためだった。金壽卿の学問的経歴を見れば、彼もまたマルクス主義言語学者としてソ連言語学の新しい動向に関心を持ったことがわかる。彼は当時「新言語理論」と呼ばれたソ連言語学者マル (Marr, Nikolai Yakovlevich) の言語理論を翻訳して紹介しただけでなく、既存の朝鮮語学界のなかにもマル理論のモデルを探そうとした¹⁰。このような事実をよく示している文章が「朝鮮語学者としての金料奉先生^{キムドッボン}」¹¹である。この文章は、60回目の誕生日を迎える金料奉の学問的業績を称賛するものだったが、当時のソ連

翻訳・出版された。これは当時のソ連言語学の概論書の翻訳の政治性をよく示す事例である。ただ、マルの見解に対する評価を除くならば、2つの本に提示された言語学研究の目標と方法に大きな違いはない。

⁹ 構造主義言語学は歴史主義言語学に対する反動であったが、歴史主義の観点を否定したというよりは、これを前提としながら言語の共時的な体系に注目したということができる。

¹⁰ ウリマル〔朝鮮語〕を研究したマルクス主義者のうち、申南澈シナムテョクや洪起文ホンギモンなどは、1930年代からソ連言語学の動向に関心を持っており、この過程でソ連の言語学者であるマルの理論を紹介したこともある。これについては崔兌鳳〔2012〕を参照されたい。

¹¹ この論文は、1949年6月に『朝鮮語研究』1-3に掲載された。

言語学の理念的基盤となったマルの言語理論を金料奉の言語理論と対比させて説明したという点で注目する必要がある。金壽卿は、社会の発展過程にしたがって言語の姿と言語学の役割が決定されるという観点から、言語改革を志向する金料奉の見解をマルの言語理論に対応させてその意義を強調したのである。しかしマル理論の批判から出発したソ連言語学界の理念論争が終わった1950年代半ばから、金壽卿は積極的にマル批判に乗り出した¹²。こうした金壽卿の歩みは、ソ連言語学界の理念論争が北朝鮮の言語学が方向性を定立するのに一定の影響を与えたことを示す例であると言える。

しかし、既に述べたように、『言語学』（1949）と『言語学概要』（1955）などのように、マル理論の追従期と批判期に出た研究書を見れば、言語分析の方法論は大きく変わらなかったことが分かる。言語学の理念論争が言語分析の方法論や言語理念を定立するには実質的な影響を与えなかったのである。これはマルクス主義言語学者のあいだでおこなわれた言語学の理念論争を、言語分析の方法論の受容という問題とは距離をおいて理解する必要があるということを物語っている¹³。

¹²『イ・ヴェ・スターリンの労作に照らしてみた言語学の諸問題』（各大学語文学部用、1952年にモスクワ大学で刊行したものを翻訳）と『ソビエト言語学の諸問題』（翻訳論文集、ロシア科学アカデミー学術会議資料集に発表されたものなどを翻訳・編集したものは、それぞれ1954年と1955年に相次いで出版されたが、この書籍の出版の主要目的は、マル理論を批判してスターリンの言語理論を強調することだった。金壽卿は前者の書籍の審査員であり、後者の書籍では、「言語学の問題に関するイ・ヴェ・スターリンの労作が社会科学の発展に対して持つ意義」、「言語学における比較歴史的方法に関する問題について」、「言語学に関するイ・ヴェ・スターリンの労作に照らしてみた中国と日本における民族語について」の3本の論文を翻訳した。

¹³高永根ほか〔2004：21〕では「旧東ドイツから出た言語学書籍を見れば、常に底辺には唯物論を置きつつ言語の構造を探索する方向の叙述法を採っている。こうした点を見れば、唯物論のようなイデオロギーは本質とは距離が遠いうわべの装いである可能性が多い」と指摘している。しかし高永根ほか〔2004〕ではこのような傾向が1960年代以後、社会主義圏で構造主義言語学を受け容れたことで現れた結果と見ているが、これは実際とは違う主張である。

ソ連言語学界と北朝鮮の国語学界がマルの言語理論に注目したのは、あらゆる方面において唯物論的な世界観を構築しなければならなかった時代の要求にマル理論が適合的だったためである。マル理論をめぐる言語学の理念論争も、マル理論で強調された言語の発展法則やそれにもとづく言語的实践の適切性に関する論争であった。こうした脈絡から見れば、構造主義が批判の対象となったのは、まさに構造主義言語学の原理が言語の発展法則と言語的实践を考慮しなかったためである。したがって構造主義への批判があったからといって、すぐに具体的な文法現象の分析から構造主義的な分析の方法論までも排斥されたかのようにつなげて考える態度は、北朝鮮の国語学界の流れを事実から把握するためには障害となり得るのである。

2-2. 理論的国語学と実践的国語学の調和

金壽卿の国語研究は、1947年の傾向をそのまま維持したが、1949年から1956年のあいだに発表した論文の大部分は、単語の形態と機能に対する徹底した分析が目立って見られる。ただし、当時の議論では、言語研究の实践的な適用を模索する態度、実践的な適用において理論的根拠を確認する態度が目立つという点に注目する必要がある。

最初に、金壽卿は理論的研究と語文規範の問題とを関連付けて議論する態度を示していた。「龍飛御天歌に見える挿入字母の本質」という1949年の論文は、越北以前に発表した「龍飛御天歌挿入子音考」と内容が似ているが、綴字法〔^{ていじ}正書法〕の問題の解決を模索するための議論であることを表明している点、崔鉉培〔^{チュエヒョンベ}〕の議論¹⁴を批判している点、ソ連言語学の議論の内容を参照しているという点などで違いが見られる。なかでも、綴字法

¹⁴ 金壽卿と崔鉉培の議論はサイシオツを「の」〔의〕のような機能をするものと見なさないところでは共通しているが、崔鉉培〔1937〕ではサイシオツを文法的な接辞として説明しているという点において金壽卿の議論と違いがある。

問題を解決しようとする目的が最も際立っているが、これは当時の形態主義綴字法^{*2}を確立するのに「サイシオツ問題」が論争の種だったためだ。金壽卿は1947年、『労働新聞』に3回にわたって論文を連載したが^{*5}、彼はこの論文でも頭音ㄴ (n)、ㄹ (r) の表記に関連して現れる「ハングル正書法統一案」の表音主義的偏向を批判^{*6}して、形態主義表記の合理性を主張した。

次に、金壽卿は言語理論的議論を辞典編纂や文字改革などと関連付けて議論した。「吐〔吐〕」^ト^{*3}の性格規定に関する議論が本格化した時期に発表した1956年の論文「朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題について (上、下)」で、金壽卿は吐の性格を究明する問題を、ソ連言語学界の議論、辞典編纂の慣習、分かち書きおよび文字改革問題などと関連させて議論した。屈折語^{*4}では語尾部分を独立的に辞典に載せることがないが、朝鮮語辞典編纂では吐を他の語彙と同じ資格で載せているという点を指摘して、吐の単語的性格を強調したり、吐を単語として捉えてこそ吐を分かち書きが可能となり、吐と語幹を分かち書きすることが分解横書き^{フロスギ}^{*5}の文字改革に寄与し

^{*2} 形態主義綴字法：綴りが不規則になっても発音に合わせて表記する表音主義に対し、形態の一貫性を重視する立場を形態主義という。

^{*5} この論文は「朝鮮語学会〈ハングル正書法統一案〉中で改正すべきいくつかの其一 漢字音表記において頭音ㄴ及びㄹについて」(『労働新聞』1947.06.06-06.08.) に収録されており、「『民族語大辞典 (가례말큰사전)』南北共同編纂委員会第7次会議資料」に再収録された。

^{*6} 「ハングル正書法統一案」と外来語表記法の根本原則に基づいた批判、各言語の様相を事例にした批判、ハングル学習の慣習を根拠とした批判などがそれぞれである。

^{*3} 吐 (토)：もとは漢文を読むときに漢字に添えて読む朝鮮語の送り字の部分 (日本の漢文訓読におけるヲコト点に相当) を意味していたが、20世紀になると助詞と同様の意味で用いられ、さらに北朝鮮では文法上の独特の用語となった。

^{*4} 屈折語：例えば英語で「私は」は「I」だが「私を」は「me」となるように、動詞・名詞等が文中での機能にしたがって異なる形をとる言語。ヨーロッパの多くの言語が当てはまる。

^{*5} 分解横書き：フロスギ (풀어쓰기)、プロソ・カロスギ (풀어서 가로스기) などと称される。通常ハングルは、単音字を音節単位で方形に組み合わせて1文字を構成する。これをアルファベットのように横にばらして表記することを「分解横書き」という。例えば、ㄱ (k) と ㅏ (a) を組み合わせて、「ㄱㅏ (kak)」という1音節の1文字を構成する代わりに、「ㄱㅏㅏ」と表記するような正書法である。

得ると主張したりした。

第3に、理論と実践を調和させようとする金壽卿の問題意識は、文体研究へと拡張される。構造主義的文体論を基本に言語学的な文体論を体系化しながら、表現の効果を高めるための方策を理論体系に組み込もうとした点も、理論と実践を調和しようとした事例として挙げることができるだろう。このような一連の過程は、構造主義方法論に忠実な文法学者でありながらも、絶えず実践的国語学を追求し、自身の学問領域を拡張させた金壽卿を理解するのに重要な端緒になるだろう。

3. 国語研究の国語学史的意義

金壽卿が残した研究を総合すれば、彼の国語研究は文法論と文体論を中心に成り立っていたといえることができる。したがって彼の国語学史的位相を明らかにするためには、彼の文法論と文体論の分野での業績が有する研究史的意義を明らかにする必要がある。崔炅鳳 [2009] では文法論と文体論分野における金壽卿の業績を概括したが、議論の性格上、金壽卿の研究を緻密に分析してはいなかった。本稿では、崔炅鳳 [2009] の評価¹⁷を前提としたうえで、彼の研究が当時の文法論と文体論の議論のなかでいかなる位相を有し、国語学の研究にどのような寄与をしたかを中心に議論したい。

3-1. 「龍飛御天歌挿入子音考」の国語学史的位相

構造主義方法論を適用して文法現象を解明した研究として注目されるのは、「龍飛御天歌挿入子音考」という論文 [金壽卿 1947] である【図1】。これは、金壽卿が発表した最初の国語学論文であると同時に彼の実力を示す

¹⁷ 崔炅鳳 [2009] では、金壽卿を「構造主義方法論に基づいた研究を先導したことと、北朝鮮の初期標準文法を確立するのに寄与した国語学者」「文体論を言語学的観点から学問的に体系化するのに寄与した国語学者」などと評価していた。

「龍飛御天歌」挿入子音考

金 壽 卿

이곳에 「挿入子音」이라 말하는 것은, 例를 들면 現代朝鮮語 「바다」가 되 있어서의 「ㅍ」과 같이, 두개의 語辭(語辭) (上例에 있어서 는 「바다」와 「가」가 융여 하나의 統合(統合) (音韻)을 일룰 때에, 그 表記에 있어 두 語辭의 接續部에 挿入되는 子音을 意味한다. 이러한 경우의 統合이란 어떠한 性質의 것인가, 子音이 統合의 接續部에 挿入되는 것은 어떠한 까닭으로 인가, 또 그 子音은 어떠한 경우, 어떻게 挿入되는 것인가——이러한 點에 關하여 若干의 考察을 하여 보자 하는 것이 本稿의 目的이다. 여기서 「龍飛御天歌」라는 限定을 배운 것은 實로 「龍飛御天歌」에 있어서 挿入子音이 가장 典型的인 形態로 多形하게 驅使되어, 挿入子音의 提示하는 萬葉相이 그곳에 遺憾없이 露呈되어 있기 때문이다. 挿入子音의 現象은 ipsis로 아야기되는 言語, 그 自體와 이러한 言語의 表記의 手 象面에 걸쳐 있는 까닭에 「龍飛御天歌」의 成立이 朝鮮에 새로운 表記法이 誕生함——「訓民正音」이 頒布된 것과 時를 같이 한다는 事實은 되지 않아서 우리들의 注目을 끄는 바이다. 即 「龍飛御天歌」의 刊行된 世宗二十七年(西曆一四四五年)은 「訓民正音」이 公布된 世宗二十八年(西曆一四四六年)의 前年에 該當하며, 또한 他面으로 「訓民正音」은 그 公布에 앞서기 三年前이며 一旦 完成된 것이 明白한 以上 (註1) 이 두 文獻은 全然 同時代의 作品으로 볼 수 있으며 또한 이 두 文獻의 制作에 參照한 學者들 가운데에 같은 人物이 가끔 보이는 것은 (例를 들면 鄭麟趾와 같은) 「昔新羅薛聰. 始作吏讀. 官府民間. 至今行之. 然皆假字

		無 聲 音			有 聲 音			母音
		k	t	p	l	m	n	ㅅ
無聲母音	k	k-k(t)k	p-k	l-goo	m-g	n-g	ㅅ-g	母-g
	t	k-t	t-t	p-t	l-d(t)	m-d	n-d	ㅅ-d
	p	k-p	t(p)p	p-p	l-b(p)	m-b	n-b	ㅅ-b
	s	k-s	s-s	p-s	l-s	m-s	n-s	ㅅ-s
	ㅅ	k-ㅅ	t-ㅅ	p-ㅅ	l-ㅅ(s)	m-ㅅ	n-ㅅ	ㅅ-ㅅ
有聲母音	ㄱ	ㄱ-ㄴ	ㄴ-ㄴ	ㄴ-ㄴ	ㄹ-ㄹ	ㅁ-ㅁ	ㄴ-ㄴ	ㄷ-ㄴ
	ㅁ	ㄱ-ㅁ	ㄴ-ㅁ	ㅁ-ㅁ	ㄹ-ㅁ	ㅁ-ㅁ	ㄴ-ㅁ	ㄷ-ㅁ
	ㄴ	ㄱ-ㄴ	ㄴ-ㄴ	ㄴ-ㄴ	ㄹ-ㄴ	ㅁ-ㄴ	ㄴ-ㄴ	ㄷ-ㄴ
母音	ㅏ	ㅑ	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ	ㅜ	ㅡ

圖1 金壽卿「龍飛御天歌挿入子音考」(1947年)

代表的な論文¹⁸である。特に、科学的研究方法論を適用して言語資料を緻密に分析し、これをもとに議論を展開する叙述の方式は、近代的論文の典型を示していると評価できる。崔旻鳳 [2009] では、この論文が誕生した背景、すなわちこの論文の土台になった構造主義言語学理論と中世国語に関する知識を金壽卿がどのような経路で学んだかという点に注目した¹⁹。

金壽卿は「龍飛御天歌挿入子音考」で言語要素の分布関係を精密に分析し、言語要素の形態、構造、意味的特性を明らかにしようとした。これは挿入子音の分布環境を提示することで確認し得る。すなわち、挿入子音「シオッ」〔ハ〕が属格〔所有等を表す名詞・代名詞等の格〕の「の」〔ㄱ〕と区別される機能を有していることを、挿入子音の分布環境²⁰を通じて明らかにし、挿入子音が結合する2つの名詞の先行語の終わりが有声音〔声帯が震えて声が出ている音〕（「母音」「鼻音」〔m や n の音〕「流音」〔l や r の音〕）の場合にだけ現れる理由について、同化現象による有声音化を防止^{*6}するためのものであることを、一般的な音韻現象に基づいて説明している。このような点から見れば、「龍飛御天歌挿入子音考」は構造主義研究方法論を国語の形態、構造、意味に対する分析に本格的に適用した論文だと評価することができる。

¹⁸「龍飛御天歌挿入子音考は、この分野ではまだこの論文を凌駕するものがないほど際立った研究として評価されている」（2000年8月19日付『韓国経済』記事）という、同時代に生きた金敏洙の評価によっても、この論文に代表される金壽卿の力量を確認することができる。

¹⁹崔旻鳳 [2009] では、京城帝大言語学講座と教授陣について調べ、この論文の執筆背景を推論しながら、小林英夫からの影響に注目したことがある。崔旻鳳 [2009] は金壽卿の東京帝大言語学科留学という事実について取り上げていなかったが、東京帝大言語学科での学習もまた小林英夫の影響の下で行われた可能性が高い。

²⁰挿入子音が属格を表す助詞“ㄱ”と重複して使われ、挿入子音が結合する2つの名詞の先行語の終わりが有声音（「母音」「鼻音」「流音」）の場合にだけ現れる。

^{*6}同化現象による有声音化の防止：たとえば“바다”（海）と“가”（へり、際、端）を合成して「海辺」という語をつくる場合、間にサイシオッを入れないと同化現象によって“바닷가”と“가”の音が濁る（＝有声音になる）が、挿入すれば“바닷갸”と有声音化が防止される。

特に彼の議論は、挿入子音（サイシオツ）を属格表示の1つとして扱ってきた従来の研究に問題提起をしたという点で、テーマ別の研究史においても重要な意味がある。それは、彼の問題提起を契機に「サイシオツ」論議が本格化したといえるためである。任洪彬^{イムホンビン} [1981] は「サイシオツ」に関する議論について、「「サイシオツ」を属格の表示とする見解」と「「サイシオツ」を音韻論的現象とする見解」に分かれると述べたことがあるが、金壽卿の議論は「サイシオツ」を音韻論的現象として把握し得る根拠を初めて提示した論文である。では、彼の議論の研究史的な意義は、挿入子音を音韻論的現象として把握する見解の出発点となったということだけにあるのだろうか。本稿では、上記論文が科学的言語研究の方向を提示した論文という点において、主題別の研究者の観点ではない国語学史的観点から上記論文の位相を明らかにしてみようと思う。

しかしこのような試みは、上記論文が完璧だと強調したり、「サイシオツ」問題を再論したりするためのものではない。実際、彼の議論で「同化現象による有声音化を防止するために挿入子音が介入する」という説明は、「硬音化は受け入れながら、あえて有声音化を防止しなければならない音韻論的理由は何か」という疑問にぶつかり、また「有声音と無声音の間に挿入子音が分布する」という説明は、“^{コギ}고기” + “^ペ배”（船）という環境において、“^{コギ}곶^베배”（釣り船）と“^{코기}고기^배배”（肉の船）とで異なって実現される現象を適切に説明できないという批判を受けたことがある²¹。しかし重要なのは、挿入子音が出現せざるを得ない理由について、彼が音韻、形態、意味論的根拠を動員して原理的に説明しようとしたことである。これはそれまでの

²¹任洪彬はサイシオツが有声音化によって弱まるかも知れない第2要素の頭音を硬音化してその弁別性を高めるという議論は説得力が弱いと評しながら、有声音や無声音の音韻論的認識が同一だという点、形態素の同一性を損なうのはかえって硬音化側だという点などを指摘した。また、同じ環境内で音韻現象が違って実現されることをどのように説明するのかについて問題提起をした。

規範的研究と次元を異にする点である。

第1に、上記論文では、対象となる言語資料を綿密に分析して挿入子音の分布特性を明快に示した。構造主義方法論の特徴の1つが言語の分布特性を把握する点にあるが、この論文で示している分析の仕方は研究史的に重要な意味を帯びている。

第2に、ウリマル^{*7}で有声閉鎖音 [b, d, g など] が音韻でないという点に基づき、挿入子音を通じて有声音化を阻止しなければならない音韻論的理由を原理的に説明した。彼は“고기” (koki > kogi) の例を提示しながら、ウリマルにおいて有声閉鎖音 [ここでは g] はただ同化作用がある場合にだけ現れる変移音であると規定した。そしてこの規定を根拠に、単語の最初の音節に有声閉鎖音が現れ得ない理由を説明した。すなわち、合成語が構成される場合、後に来る語根が単語としての独立性を維持しようとする属性があるならば、当然有声音化に抵抗するし、有声音化を阻止するために挿入子音が介在するほかはないと見たのである。このような論述を通して見れば、金壽卿は音韻論的な現象の原因を、形態・意味論的側面から探究し、説明しようとしたと考えられる。これを研究の水準という点から見れば、言語現象を解明するところから、その現象の原因を説明するところへと研究が発展したことを物語るものであり、その点で注目に値する。

3番目に、上記論文では、挿入子音の出現について、属格を表示する現象ではなく音韻論的な現象であると規定しながらも、挿入子音が含まれる構成を属格構成として説明した。このことと関連して、上記論文では「挿入子音ではない語辞の順列、すなわち意義部²²の相互の位置が従属的な関

^{*7} ウリマル：字義どおりには「われわれの言葉」という意味であるが、ここでは韓国語／朝鮮語という用語上の南北分断を克服する意味で用いられていると考え、そのままカタカナ表記した。

²² 現代の北朝鮮国語学界では、分析的な側面において単語を成す最小単位を「形態部」、総合的な側面において単語形成に参加する単位を「意味部」として区分しているが、これは

係を表す形態部²³」であるという点を明らかにした。このように、文法的機能を特定の形態素に対応させて説明するのではなく、構成要素間の相互の位置関係に対応させて説明したことは、文法形態素の概念を拡張したという点のみならず、構成要素間の意味的關係が文法現象として発現すると考えた点において研究史的な意義がある。

ここで金壽卿が文法形態素を広い概念として理解した事実を、単語の形態を単語間の相互関係の結果として広く見る議論と関連して考えることも意味があるだろう。このような観点は1956年の論文で具体化されており、彼は「広い意味での形態は、単語それ自体の形態の変化以外に、単語の間の相互関係、複数の単語の結合、単語結合における単語の順序等を含む。広い意味におけるかかる形態は、単語を個別に見ては見いだせない」との見解を提示し、名詞、形容詞、動詞の文法的な範疇が吐との相互関係を通じて表現されることを強調している²⁴。こうした主張は、同じ論文で金壽卿が引用していた中国の方光燾の見解と同様である²⁵。金壽卿

南朝鮮の国語学界で形態素を構成素と形成素として区別しているような方式だ。ところで私たちが注目しなければならない点は、このような区分方式がすでに金壽卿 [1947] に現れているという点だ。ただ、金壽卿 [1947] では文法的形態素を示すときに、「形態部」という用語を使って、語彙的形態素を示すときは「意義部」という用語を使っているという点を留意する必要がある。

²³ 北朝鮮の国語学界で「形態部」は形態素のような概念で使われるが、これについては、金壽卿が1947年に発表した論文で形態部という用語を使っている。1949年に金壽卿が翻訳した『言語学』(A. A. レフォルマツキー著)でも「形態部」という用語が使われている。したがって北朝鮮国語学界で使う形態部という用語の概念は、1947年金壽卿の論文から始まったものだとわなければならないだろう。

²⁴ これは、「朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題について(下)」である。この論文では、吐が1つの品詞として単語的な正確を持っていることを主張しているが、これは吐が単語の屈折形態として表れるという見解を反駁するものであった。こうした主張を強化するため、金壽卿は単語の内的な形態変化を表す形態素以外の諸単語間の相互関係も、広い意味の形態であることを強調したのである。

²⁵ 方光燾 (Fuang, Guang Tao, 1898-1964) は、構造主義言語理論を中国語の分析に適用した代表的な言語学者である。1930年代における中国語学の体系化に寄与し、新中国の樹立以降

が引用した方光燾の見解は、「私は単語の相互関係、単語の結合が広い意味での形態であると認める。個別的な中国語の単語に固有の形態は少ないため、品詞を分類する際には当然広い意味の形態に依拠せざるを得ない」というものであった。方光燾が、孤立語^{*8}である中国語の形態論を論じる際に、文法形態素の観点を広く見る必要があるとしたのに対し、金壽卿は文法形態素の概念を広く見る観点がウリマルの文法範疇の特徴、とりわけ吐の正確を説明するのに活用し得ると考えたのである。このように彼が文法的な関係を表現するあらゆる言語要素（単語の順序、単語間の相互関係、ゼロ形態素までを含む）を一貫して形態素と認識し、こうした認識を多様な議論に適用することができたのは、構造主義言語理論に対する深い理解があったからこそ可能なことであった。

3-2. 「朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題について（上、下）」の国語学史的位相

1950年代以後、金壽卿が発表した論文のうち文法論に関連した新しい研究といえるのは「朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題について（上、下）」である【図2】。この当時、北朝鮮の国語学界は吐の性格を規定することに議論を集中させていたが²⁶、そのなかでなされた議論は膠着語^{*9}である国語の

も中国語学の理論的な発展を先導する言語学者として活動した。金壽卿が引用した方光燾の論文は、中国の品詞論争が一段落する要因となったもので、文法形態素が発達していない中国語の特性上、単語内部の形態変化ではない、諸単語の相互関係やそれらの結合の様相に根拠をおいて品詞を分類しなければならないことを主張したものである。

^{*8} 孤立語：中国語・ベトナム語等、単語が常に一定の語形で現れる言語。

²⁶ 1958年「朝鮮語形態論の特性に対する学術討論会」と1963年「朝鮮語文法構造研究において主体をしっかりと確立するために」という学術討論会での主な争点は、吐の性格問題であった。

^{*9} 膠着語：トルコ語・朝鮮語・日本語のように、語幹に語尾等の接辞を付けることで、文のなかでの文法関係を示す言語。例えば「食べ-ます」「食べ-ない」などでは「食べ」を語根といい、「ます」「ない」などの語尾を接辞という。

조선어 형태론의 몇 가지 기본 문제에 관하여 (상)

김 수 경

I

과학으로서의 문법의 특성은 그가 추상하여 일반화하는 성격을 지니고 있는 점에 있다. 이에 관하여 이·혜·쓰말린은 다음과 같이 말하고 있다.

<문법의 뚜렷한 특성은 그것이 구체적인 단어가 아니라 일반적으로 아무런 구체성도 없는 단어물 고려에 두면서 단어의 변화에 관한 규칙을 주며 그가 어떠한 구체적인 문장, 말하자면 구체적인 주어, 구체적인 술어 동종이 아니라 어떤 한 문장의 구체적 형태에는 관계 없이 일반적으로 모든 문장을 고려해 두면서 문장 구성을 위한 규칙을 주는 점에 있다. 따라서 문법은 단어에 있어서와 문장에 있어서 특수적인 것과 구체적인 것을 추상하여 비리고 단어의 변화와 문장에 있어서의 단어의 결합의 기초에 놓여 있는 일반적인 것을 끌어 내어 이로부터 문법적 규칙, 문법적 법칙을 만든다. (이·혜·쓰말린; 《암스주의와 언어학의 제 문제》 조선어 번역, 1952년 33-34 쪽지).

따라서 문법적 규칙은 특수적인 것과 구체적인 것으로부터의 추상이며, 단어와 문장에 고유한 일반적 특성의 반영이다. 이러한 의미에서 문법은 인간 사물의 거대한 추상 작업의 결과이며, 사물의 거대한 성과의 지표 (동양서, 34 쪽지)로 된다.

조선어의 문법을 연구함에 있어서도 문법적 추상, 문법적 일반화의 원칙 위에 이론적 서서 조선어의 문법적 규칙, 조선어의 문법적 법칙을 설정하도록 노력하여야 할 것은 다시 말할 필요도 없다.

그러나 때때로 구체적인 언어는 자기 고유의, 오직 그에게만 내속된 특성을 가지고 있다. 따라서 어떠한 언어의 연구에 있어서나 그 언어가 가지는 온갖 특성, 온갖 고성을 증명하는 것이 가장 중요한 과업으로 나뉜다.

조선어의 문법 구조를 연구함에 있어서도 조선어의 실제적인 언어 자료에 밑

— 45 —

图2 金壽卿「朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題について」(1956年)

文法的特徴を説明するのに寄与した点において意義を有している。金壽卿の研究は、そこでおこなわれた吐の議論における主軸をなすものであった。

彼は単語の構造を語根、接頭辞、単語造成の接尾辞、形態造成の接尾辞(相、時称、尊敬を表すもの)、吐(格、法、階称を表すもの)と分析し、吐を形態造成の接尾辞と区別して単語の統辞論的な位置を表す「位置的形態部」として見た。そして吐を単語の性格と接辞的性格を兼ねた二重的存在と規定しながら、独立的な品詞として設定した。このような見解は、既存の品

詞分類の類型と比較したときに次のような特性がある。

まず、金壽卿の見解は吐を品詞に含めた崔鉉培^{チュエヒョンベ}の見解と似ているが、吐の範囲を助詞だけでなく語尾まで包括するものと捉えたという点において崔鉉培の見解と相違している。第2に、金壽卿の見解は助詞と語尾を別なものとして区分しなかったという点で鄭烈模^{チョンリョルモ}と類似する点があるが、鄭烈模が吐を単語でない文法的関係を表す接辞として見たという点では彼と異なっている。第3に、金壽卿の見解は助詞と語尾を単語と認定するという点で周時經^{チュシギョン}と類似しているが、周時經が助詞と語尾を機能にしたがって「キョツ」〔ㄱ=冠形格助詞「の=의」を除いた助詞〕(-는 [-は]、-ㄴ [-は]、이 [が]、가 [が]、을 [を] など)、「イツ」〔읻=接続助詞「과」のような連結語尾〕(-고 [-て]、와 [と] など)、「クツ」〔ㄷ=終結語尾〕(-다 [-だ]、-어라 [-せよ] など)と分類したという点で周時經とは違いがある。これらを総合すれば、金壽卿の形態観は周時經の形態観を引き継いでいるものの、品詞分類で周時經と違いがあるということが分かる。

このような金壽卿の見解は、その後の北朝鮮の形態論研究に深い影響を及ぼすが、北朝鮮での吐の議論が吐の膠着的性格を重視する方向で整理されたという点に留意する必要がある。すなわち『朝鮮語文法』1 (1960)²⁷では以前の文法書とは違い、吐を独立品詞でない文法的接辞として分類することによって、吐の範疇に関する限り、金壽卿の見解を否定している。しかし『朝鮮語文法』1 (1960)で文法における膠着要素を全て文法的接辞として分類しながらも、これをさらに吐と形態造成の接尾辞として区分することからすれば、2つの範疇の機能的な違いに注目した金壽卿の見解が依然として有効であったことを確認することができる。『朝鮮語文法』(1964)では、文法的膠着要素を全て吐と見ているが、吐を「位置吐」と「非位置

²⁷ 金壽卿は『朝鮮語文法』(1960)の形態論の部分^{リダグニョン}を李權榮と共著で執筆した〔金榮兎・権スンモ 1996: 348〕。

吐」と区分することによって、やはり吐と形態造成接尾辞を機能的特性によって位置的形態部と非位置形態部として区分した金壽卿の見解を部分的に受け容れている。

結局、1964年の文法書によって調整された見解は、吐を「チャリ吐」〔차리토; チャリは場所〕と「キウム吐」〔끼움토; キウムははめ込むこと〕に区分する現在の文法体系につながる。したがって、現在の北朝鮮の標準文法に見られる形態分析の立場は「位置的なものとは非位置的なものを異質であるとして分離するのではなく、すべて吐の範疇に入れて位置吐と非位置吐に区別する」ことにあるといえる〔金榮晃 2004〕。だとすれば、吐の範疇をどのように設定するかはさておいたとしても、文法的膠着要素のあいだの機能的違いに注目した金壽卿の見解が、形態分析の議論を深める契機になったことは明らかな事実である。

ところで上記論文でとりわけ注目すべき点は、品詞を見る観点と文法形態素を見る観点のユニークさである。金壽卿が品詞を分類する基本的な観点は、文法形態素に対する観点と連動している。品詞を見る観点は、吐の性格についての議論の過程で明確に表れている。金壽卿は単語の範疇をまず意味論的類型によって区分し、これをさらに従来の品詞部類で分けるという方法を採用している。ここで意味論的類型は「語彙の意味」と「文法的意味」に区分され、「名詞、形容詞、動詞」は語彙の意味を持った品詞、「冠形詞、副詞」は語彙の意味と文法的意味が融合した品詞、「吐」は文法的意味を持った品詞に区分される。結果的には、伝統的な品詞分類から大きく異なるものではないが、このような観点は「吐」の性格および範疇を規定する上で重要な意味を帯びることになる。

（「朝鮮語形態論のいくつかの基本問的題について（上）」における説明）

吐の形態論的機能と関連してとりわけ指摘しなければならないことは、朝鮮語の吐が名詞（数詞、代名詞を含む）、形容詞、動詞に共通して用い

られるという事実である。

上の説明は、意味論的類型によって品詞を区画することに由来している。すなわち、語彙的意味を持つ「名詞、形容詞、動詞」が1つの意味論的類型に分類されるとすれば、文法的意味を持つ吐はこの3つの品詞に同一に機能すると見るのである。このような観点から、金壽卿は次のように説明を続ける。

（「朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題について（上）」での説明）

仮に朝鮮語の動詞に時称、法、階称などの範疇を表す文法的形態があるとするならば、まさにそれと同一の文法的な表現手法が形容詞にもあり、名詞にもあるということができる。

このように名詞、動詞、形容詞に付される文法形態素の性格を同一のものとする態度は、文法現象に対する新しい説明につながる。特に“이^イ다^ダ”〔である〕の性格規定と文法的自立性についての判断は、テーマ別研究史において重要な意味を帯びる。

第1に、金壽卿は“이^イ다^ダ”の「指定詞」説を否定している。「動詞、形容詞」に“~^ダ”〔だ〕という「吐」が結合するように、「名詞」にも“~^ダ”という「吐」が使われると見る。そしてこのような観点のもとで、“이^イ다^ダ”を吐の一種と規定する。“이^イ다^ダ”を、名詞につく吐“~^ダ”の変種、すなわち音韻論的異形態として捉え、「指定詞説」に反論したのである。

第2に、金壽卿は名詞を自立的形態素として捉え、動詞と形容詞を依存的形態素として見る観点を批判する。この批判は名詞、動詞、形容詞を語彙的意味を持つ類型で分類することに由来している。すなわち“^ソ가^ガ”〔牛-が〕、“^ソ를^ル”〔牛-を〕、“^ソ다^ダ”〔牛-だ〕などにおける“^ソ”〔牛〕と、“^ヌ다^ダ”〔老い-る〕、“^ヌ고^コ”〔老い-て〕などにおける“^ヌ”〔老い-〕は同じ意味的単位な

ので、これらは全て自立性があると考えたのである²⁸。そして、動詞と形容詞が単独で使われた例として、“^{カムドルダ}감돌다”〔漂う〕、“^{コッチャブダ}견잡다”〔食い止める〕、“^{オガダ}오가다”〔行き来する〕、“^{コムブッタ}검붉다”〔赤黒い〕、“^{コムボソツ}검버섯”〔染み〕、“^{ヤッボダ}알보다”〔見下げる〕などのように、用言の語根が含まれた合成語^{*10}を挙げている²⁹。このような観点から、先行単語の自立性を根拠として、名詞に付く助詞は単語であると認定し、動詞や形容詞に付く語尾は単語と認定しないという見解は受け容れられないと論じたのである。こうした観点は、吐（助詞と語尾）が単語と文法形態素の2つの特性を兼ねる準自立的な存在であり、名詞、動詞、形容詞の文法的範疇が吐の助けを得て表現されるという主張につながっていくことになる。

現在の観点とは異なる点が多いが、意味論的類型によって品詞を区分する見解や、単語の形態が単語間の相互関係を包括するといった見解を受け容れ、ウリマルの吐に関する議論を深めたことはあらためて評価する必要がある。特にこのような見解が周時經の議論とある面において呼応しているのも、国語学研究の系譜に関連して注目する必要があるだろう。

3-3. 「文風に対する理解をより一層深化するために」の国語学史的位相

南北朝鮮の国語学界は1960年代になってようやく文体論についての研究

²⁸ 名詞と用言の分布上の違いを、「動詞と形容詞は常に一定の対象をある方式によって規定するのを示しているため、名詞に比べて単独で使われる場合が少ない」と説明する。周時經が『マルモイ [말모이]』〔最初の朝鮮語辞典〕に動詞と形容詞の語幹だけを記載したのを見れば、周時經もまた金壽卿と同様に、動詞と形容詞の語幹を名詞のように1つの意味的単位として理解したといえよう。

^{*10} 用言の語根が含まれた合成語：ここで述べているのは、たとえば動詞“^{オダ}오다”（来る）、“^{ガダ}가다”（行く）の語根はそれぞれ“^オ오”、“^ガ가”であるが、これを合成し“^{オガダ}오가다”（行き来する）とした場合、語根“^オ오”が語尾抜きに単独で現れているという考え方である。

²⁹ 現在の学校文法ではこれを非統辞的合成語として見るが、金壽卿は意味的観点で語根の自立性を判断しているため、彼の体系内では非統辞的合成語という概念は成立し得ないだろう。

を本格化しはじめた。この時期には、南北朝鮮ともに文体論についての単行本が出版された。李仁模^{イインモ} [1960] が南北朝鮮の国語学界で初めて出版された文体論の単行本である。北朝鮮の場合には金壽卿 [1964] が初めて出版された文体論の単行本である。しかし重要な点は、2つの文体論のアプローチが異なるという事実である。

李仁模 [1960] は、小林英夫 [1944] のアプローチと同じ問題意識を示す文体論である。その特徴は、文体論の科学化を志向しながらも、作家の作品を対象として表現方法の特徴に関連する問題を考察することを究極的な目標とする点にある³⁰。文体の最も基本的なものは、作家の個人的な文体であり、文体研究もまた作家の個性が現れる文学作品の分析に必要なだと考えたためである。ただ、作家の個性を把握する際に言語学的方法論による文体分析が必要だとする点において、文学における文体論とは異なっていたといえる。

これに対し、金壽卿 [1964] は個人の創造的文体よりは、状況による言語表現としての文体の問題に関心を持ったと考えられる。これは、金壽卿の文体研究が文風^{ムンフン}^{*11}の確立を目標に始められたためである。このような点で彼の文体論は、「一般人の日常生活において自然に行われる言語活動を対象にした」構造主義者バイイ (C. Bally) の「表現文体論」と同じ志向性を持つと見ることができる。しかし金壽卿の著書『朝鮮語文体論』を直接確認することはできない状況で、その文体論の特徴を詳らかにするのは限界がある。ただし、金榮晃・權スンモ編 [1996 : 212] において、「この本は言語実践科学としての文体論研究の対象と役割を明らかにしたものであり、これによって朝鮮語文体論が成立することが認められるようになった」と

³⁰ 李仁模 [1960 : 53] では、「文体とは、作家の美的理想に適合し、個性がよく反映された一定の構造の文章である」と定義している。

^{*11} 文風^{ムンフン}：言葉と文章の品格といった意味の用語。

いう評価を参照し、金壽卿文体論の志向するところを明らかにすることはできるだろう。これと関連して注目されるのが、「文風に対する理解を一層深化するために」（『朝鮮語学』3号、1963）という彼の論文である³¹。

文風の定立という問題は、北朝鮮の文体論研究の核心的な主題だということができる。ここで文風とは、個人的な文体でなく、社会的意思疎通における文体を意味する。文風に対する取り組みが北朝鮮の文体論を活性化させた契機になったということは、北朝鮮の文体論の方法と目標を決めるのに影響を及ぼしたと見られる。

2005年に社会科学出版社から出版された『朝鮮語学全書』のなかの「朝鮮語文体論」では、「文体は、交際分野と目的に合わせて成り立つ体系、表現的効果を高められるようにする体系であり、そのような文体論的手段と文体論的手法の体系は、一時的・臨時的・条件的な体系ではなく、歴史的に堅固に定着し、構造的に固定化され、社会的に認識された現実的な体系である」（23ページ）と述べている。これは、文体論が文の機能、表現的効果、表現の社会化などに注目しなければならないという主張であると理解することができる。だとすれば、作家の個性的文体についての研究は言語学的文体論において周辺的な領域とならざるを得ない。これは北朝鮮の文体論がバイイの表現文体論に基づいて成り立っていることを物語っているといえる。このように推定する根拠は、上記論文の説明内容においても比較的明確に表れている。

（「文風に対する理解を一層深化するために」の説明）

言語は人間活動のあらゆる分野において交際的手段として利用される

³¹ 文体論に関連した金壽卿の研究は、これ以外に「最近の政論に表れている会話体の要素」[金壽卿 1964b]、「作家の個性と言語」[金壽卿 1964a] などがあるが、「文風に対する理解を一層深化するために」[金壽卿 1963] が、北朝鮮の文体論研究の動機や金壽卿の文体論の特徴を示しているため、これを集中的に分析する必要がある。

だけに、その交際の分野、交際の条件、交際の目的、陳述の内容、対象の特性等々のそれぞれの具体的状況によって、それに適合した言語手段を選択、使用しなくてはならない。〔中略〕では、私たちの言語実践においてそれぞれの具体的状況とはどのようなものか。それはまず私たちの言語交際が行われる場面、条件によって言語行為の具体的な発現形態が変わってくるということである。

上の内容に注目して、崔炅鳳〔2009〕では、金壽卿の文体論は意思疎通のためのラング (langue)*12としての文体を分析し、言語の表現効果を記述しようと考えた構造主義者バイイ (C. Bally) の「表現文体論」と同様の志向性を有すると評したことがある。このような点で陳鐘華^{チンジョンファ}〔2004〕が翻訳したバイイの次のような言明と、金壽卿の上記言明を比較してみるのも意味があるだろう。

(バイイの文体観)

私たちの研究において本質的に文体論的な部分は、表現事実の感情的な性格、これを産出するためにラングによって利用される諸手段、この事実の間に存在する相互間の諸関係、要するにこれらの要素たるあらゆる表現体系を含むものである。〔陳鐘華 2004〕

さらに1964年に発表した「最近の政論に表れている会話体の要素」〔金壽卿 1964b〕で提示している文体分析の具体的な方法や目標は、金壽卿の文

*12ラング (langue) : ソシユールの一般言語学で提示された用語。個々人が発する個別具体的な言葉をパロール (parole) と呼ぶ一方、社会的に共有された言語の体系をラング (langue) と呼んだ。パロールをメッセージ、ラングをコードだという場合もある。これを文体論に適用すれば、個別作家の個性的な文体はパロールに該当し、ある社会的集団のなかで共有される文体はラングに相当するといえる。

体論とバイイの文体論の関連性をより明瞭に示している³²。

一方、バイイと金壽卿の違いは、金壽卿が記述的な表現文体論に「表現効果の向上のための方案」を結合させることによって、これを実践的文体論へと転換させたところに求めなければならないだろう。文風についての議論を通じてみれば、金壽卿はバイイの文体論が排除しようとした修辞学的技法の問題を積極的に含めていると言えるためである。

金壽卿は、上記論文で「言語行為の具体的な情況、言語手段の表現性」などのように、言語学的文体論に関連した問題を論じているが、言語実践において党的で人民的な立場を堅持する問題と革命遂行にとって緊要な内容を伝達する問題などのように、実践的問題にも注目した。党的で人民的な立場の堅持、革命遂行に緊要な内容の伝達などは、いわば修辞学的な問題だということができる。であるならば、金壽卿の『朝鮮語文体論』は、ある構造主義者がどのように実践的国語学を体系化するかを示す資料であるといえよう。しかし金壽卿の『朝鮮語文体論』を直接検討することはできないため、残念ながら、これについての議論は先送りするほかはない³³。

³² 金壽卿は、この論文で会話体の普遍的な特性を文章論的、形態論的、語彙論的な側面から分析し、文体論研究の志向すべき点を示している。特に「会話体と叙事体を分け、それらの特性を明らかにした後、それぞれの具体的なことばや文章において会話体や叙事体の比率がどのようになっており、それらの配合関係がどのように異なってくるのかということ調べることは、ウリマルの現状を明らかにし、その歴史的な動きを垣間見るための一助となり得る」と述べている部分は、文体論研究の具体的な目標や方法を明瞭に説明しているという点で、注目する必要がある。

³³ 1964年（金壽卿が『朝鮮語文体論』を出版した年）を前後して発表された金壽卿の文体論関連の論文と、1965年以降に出版された北朝鮮の文体論の書籍の構成や内容を総合してみれば、『朝鮮語文体論』（1964）の構成や内容を概略的に推論することができる。今後、西欧および日本の文体論との関連性、1964年以前に発表された論文と『朝鮮語文体論』の関連性、1964年以降に出版された北朝鮮の文体論の単行本との関連性、南朝鮮で出版された文体論の単行本との違いなどが総合的に解明されなければならないだろう。

4. 結論

本稿においては、金壽卿の言語学に関連した翻訳物、文法論および文体論関連の論文等を分析し、彼の研究が有する国語学史的な意義を論じた。そして金壽卿の研究を、理念の時代を生きざるを得なかった構造主義者が、理念を意識しながら模索した結果として評価した。そのことを通じて、本稿では、北朝鮮の研究傾向を「ソ連言語学理論の導入と構造主義文法からの断絶」と単純化する既存の研究の観点を批判した。こうした批判は、南北朝鮮の国語学研究を合わせた国語学史記述の可能性と必要性を暗示するものであった。これまでの議論の内容を整理すれば、以下のようになる。

2では、金壽卿が翻訳した『言語学』において採択していた用語や、これについての概念説明を根拠とし、構造主義言語学の分析方法論が当時の北朝鮮の国語学界においてまだ有効であったことを示し、金壽卿の国語学研究を「構造主義の研究方法論と唯物論的言語学が調和」(2-1)、「理論的国語学と実践的国語学の調和」(2-2)として特徴づけた。

3では、学説史の観点から金壽卿の国語学研究の持つ意義を説明した。3-1では、「龍飛御天歌挿入子音考」の意義として、「挿入子音が出現せざるを得ない理由を音韻、形態、意味論的な根拠を動員して原理的に説明した点」を論じた。この議論の過程で「形態部(形態素)」という用語の出現と、これに対する概念規定の研究史的意義を説明した。3-2では、「吐を単語的性格と接辞的性格を兼ねた二重的存在と規定しながら、独立的な品詞と設定した」議論の国語学史的な系譜を明らかにし、その論理が北朝鮮の標準文法において吐の範疇を設定するのに与えた影響を説明した。3-3では、金壽卿の文体論研究が北朝鮮の文体論の方法と目標を決定するのに影響を及ぼしたと論じ、彼の文体論がバイイの表現文体論に「表現効果を高めるための方案」を結合させた実践的な文体論であることを浮き彫りにした。

参考文献

- 金壽卿 [1947] “龍飛御天歌” 挿入子音考”, 『震檀學報』 15.
- [1956a] “조선어 형태론의 몇가지 기본적인 문제에 관하여 (상)”, 『조선어문』 1956. No.1.
- [1956b] “조선어 형태론의 몇가지 기본적인 문제에 관하여 (하)”, 『조선어문』 1956. No.2.
- [1963] “문풍에 대한 리해를 더욱 심화하기 위하여”, 『조선어학』 1963-3.
- [1964a] “작가의 개성과 언어”, 『문학연구』 1964-3.
- [1964b] “최근의 정론들에 나타나고 있는 회화체의 요소”, 『조선어학』 1964-5.
- 레플마트쓰끼, 아. 아. (김수경 역) [1949] 『(대학용) 언어학』, 교육성.
- 姜信沆 [1996] 『國語學史』 (增補改訂版), 서울: 普成文化社.
- 高永根 외 [2004] 『북한의 문법 연구와 문법 교육』, 서울: 박이정.
- 高永根 [1999] 『북한의 언어문화』, 서울: 서울대출판부.
- [2001] 『한국의 언어연구』, 서울: 역락.
- 과학원 (科学院) [1954] 『스웨트 언어학의 체문제』 (번역 논문집), 평양: 과학원.
- 교육도서출판사 (教育圖書出版社) [1955] 『이. 웨. 스탈린의 로작에 비추어 본 언어학의 체 문제』, 평양: 교육도서출판사.
- 金敏洙編 [1991] 『북한의 조선어 연구사』 1-4권, 서울: 녹진.
- 金敏洙 [1980] 『新國語學史』 (全訂版), 서울: 一潮閣.
- [1990] “朝鮮語學會의 創立과 그 沿革”, 『周時經學報』 5, 50-74.
- 金榮晷 [2004] “조선어토의 문법적처리와 문법교육의 효율성 문제”, 『이중언어학』 24, 9-19.
- 金榮晷, 권승모 (權スンモ) 편 [1996] 『주체의 조선어연구 50년사』 평양: 김일성종합대학 조선어문학부.
- 朴甲洙編著 [1994] 『국어 문체론』, 서울: 대한고과서.
- 小林英夫 [1944] 『文體論的美學的基礎づけ』, 東京: 筑摩書房.
- 李商赫 [2007] “해방 후 초기 북쪽 국어학 연구의 경향 -1945~1950년 초기 국어학 연구자를 중심으로.”, 『어문논집』 56, 5-32.
- 李仁模 [1960] 『文體論』, 서울: 東華文化社 (宣明文化社, 1974).
- 李俊植 [2002] “일제 강점기의 대학 제도와 학문 체계 - 경성체대의 조선어문학과를 중심으로”, 『사회와역사』 61, 191-218.
- 李忠雨 [1980] 『京城帝國大學』, 서울: 多樂園.
- 任洪彬 [1981] “사이시옷 問題의 解決을 위하여”, 『國語學』 10, 1-35.
- [1997] 『북한의 문법연구』, 서울: 한국문화사.

- 鄭光 [2006] 『훈민정음의 사람들』, 서울 : 제이앤씨.
- 陳鐘華 [2004] “수사학과 문체론의 관계를 Charles Bally 의 문체론”, 『수사학』 1, 180-200.
- 崔炅鳳 외 [2007] 『해방 이후 국어 정립을 위한 학술적. 정책적 활동 양상』 (국사편찬위원회 구술 채록 자료).
- 崔炅鳳 [2006] “문법 교과서의 내용체계상 문제점과 개선방안”, 『국어국문학』 142, 431-463.
- [2008] “일제 강점기 조선어 연구의 지향”, 『한국어학』 40, 127-148.
- [2009] “金壽卿의 국어학 연구와 그 의의”, 『한국어학』 45, 363-385.
- [2012] “국어학사에서 柳應浩의 위상과 계보”, 『한국어학』 54, 291-324.
- 崔鎬哲 [2002] “자료 발굴과 소개 : 1950년대 말 조선 민주주의 인민공화국에서의 조선 언어학 역사”, 『한국어학』 17, 357-384.
- 胡裕树等 [2003] 『方光燾与中国语言学』, 北京 : 北京语言大学.

(森類臣・板垣竜太 訳)